

《座談會》

出席者 (ABC順)

大学工学部教授 平井恒夫

大学文学部教授 北垣宗治

女子大学助教授 中島和子

中学校教諭 J. M. RASCHE

大学法学部教授 佐藤幸夫

(司会) 竹中正夫

(大学神学部教授)

同志社と国際交流

竹中 みなさんは、それぞれの領域で国際

的な経験と関心をもったかたがたですが、現在、国際交流・国際教育の点で関係しておられることをご紹介いただけませんか。

佐藤 私は、大学の国際交流委員会のメンバーで、浅香先生が幹事をしていらっしやったのですが、現在ご留学中でございますので、そのあと私が仰せつかっています。

竹中 いつできましたか。

佐藤 七五年の秋に準備委員会ができて、七六年の三月四日に正式に国際交流委員会内規というのができました。学事課に国際係というのが設置されて、事務的なお世話をしております。

竹中 女子大学のほうはどうでしょうか。
中島 女子大では教職員の留学、海外研修

ということはございますが、特定の係はまだできていません。

竹中 シンスター・カレッジというような大学がアーモストにある関係で、そういう関係はございますか。

中島 私が行っておりましたクレアモントの大学や、宣教師のウイン先生のご卒業になった学校とのお話はあるにはあったのです

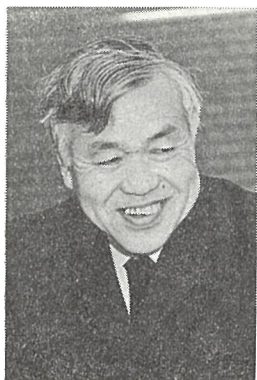
が、実現しておりません。

平井 国際交流委員会では、同志社大学の英文カタログの準備をしており、おそらく三ヶ月ごろに出版されるのじゃないかと思っています。

北垣 そのカタログには私もほんの少しだけ関係したんですが、けっきょく、同志社大学にある科目はあまりにも多すぎるので、科目名と担当者名が並ぶだけで、内容の記述は今回は放棄するのだと聞いております。あれは、ほんとうは内容まで入るのがよろしいですね。

平井 いちおう講義題目だけになっております。

北垣 講義題目だけでは意味のわからない場合がありますから……。たしかに同志社大



平井 恒夫氏

学では一人の学生が年間十科目から十五科目平均でとるわけですね。アメリカでしたら八科目くらいですね。ですから、これだけの科目の内容を詳しく書いたら、非常に大部なものになると思います。

平井 ヨーロッパの大学でもカタログが出ておりますが、内容についてはあまり書いておりませんね。おもに題目です。それから想像するしかないわけです。

北垣 つまり、題目を見れば内容がわかるわけですね。

平井 工学の分野ではだいたいわかります。工学の分野では、研究は国際的になっていきます。国際的に協力し、また競争しているというのが現況です。力学とかすでに国際語となっている手段を用いますので、意志の伝達是非常に簡単です。

竹中 工学以外でも、全般的にいえることは、学問の世界の国際化ということは非常に進んでおりますね。人文社会の分野でも、注目される論文は英語とかドイツ語に訳して紹介しようという努力がかなり学界に強くあります。

北垣 それに関連して、私、同志社で非常

にありがたいと思いますのは、一年間留学させていただいて、その間給料が全部出て、二年めに延長しても給料が出る。三年めから出なくなる。しかしクビは切られない。こんなありがたい制度は世界にないだろうと思います。というのは、津田塾大学の友人は、留学しますとその間給料ストップです。その点、同志社は寛大で、二年間は出る。それをまたアメリカの友人と比べますと、ハーヴァードの教授たちでも、一年間のファローのときは、給料は半額に削られますね。半年間だったら全額もしくは三分の二とか、そういう制度です。とにかく同志社みたいに二年間まるまる出してもらえて、帰ってよく調べてみたら、入試手当の一律分まで出ている(笑)。

竹中 寛大なのでしょうか。

北垣 これは驚くべきことで、こんな状況なんだから、これはがんばらないといけないという気が、正直なところいたしますね。

平井 私自身は、じつはマンチェスターにいましたときに、日本からきている学術雑誌が図書館に積んであるのです。はじめはなぜかさっぱりわからなかったんですが、オランダの大学へちょっと講義に行くので原稿を書



中島 和子氏

て仕事をしています。

竹中 一九四八年から五〇年にかけて、私は同志社で勉強していましたが、アメリカン・ボードの宣教師のかたがたが、ご夫妻でいらっしやったのも勘定すると、十二、三人はいらっしやったでしょう。そういう点ではたいへんにぎやかでした。

ラッシイ 昔は一つのボードが一つの学校のめんどろをみましたが、いまは、いくつかのボードが協力して全部として責任を果たすようにしています。また、宣教師ではなく、それぞれの分野の専門家の交流をはかったり、日本からアメリカに人材を迎えることを考えたり、ずっと多様化されてきているとおもいます。

竹中 たしかに、多様化しているということはいえるでしょうね。女子大に専任でいらっしやる外国の方は何人ぐらいですか。

中島 宣教師の方を含めて、専任で五人です。

竹中 その他、中学にはラッシイさん、高校にバーランドさんという専任の方がおられ、香里に一人、女子中高に四人、中学に一人、それぞれ囑託の方がおられます。昔にく

らべて、いま同志社に専任でいらっしやる外国の方は、ずっと少なくなっているのでしょうか。

北垣 囑託を合わせれば、絶対数は必ずしも減っていないと思いますけれども。いまは宣教師でない外国人の先生方がおられますし、タッカーさんみたいに、宣教師ではあるが、特別にそれとして来ていただいているわけじゃないというケースもあります。

竹中 昭和四十七年のときに、大学で専任の方が七名で、囑託が二十五名、五十二年は専任が五名、囑託が三十八名となっています。

中島 女子大の場合は、その調べられたのでは、専任の方は前に比べてふえているんじゃないか。

竹中 女子大の年代の比較が出ておりませんけれども、ふえているかもしれませんね。

中島 ただ、以前のようにヒバード先生とか、クラップ先生とか、二世の吉川先生のように、長い間いらっしやるという方がございません。

北垣 デントン先生という特別の例がありますから、それをつい標準になさるわけですね。

きまして、そして、マンチェスターの大学のリーダーというかなり年輩の先生に直してもらったのですが、その人は、わしは日本人にも友人が多い、だから日本人の書く英語には慣れている、直してやろうとおっしゃいましたね。それでやっと理由がわかりました。幸い同志社に入れていただいていたから、ケリー先生にみな直していただきまして、非常にありがたいとおります。

竹中 ラッシイ先生、昔のアメリカン・ボード(ABCFM)から同志社に現在来ておられる宣教師の方は何人いらっしやいますか。

ラッシイ 現在は、グラント夫人と私と二人だけです。アメリカン・ボードは、新島先生を支援して同志社の創立以来深い関係にあります。今日では、他のボードと協力し

同志社の精神と国際交流

竹中 ここで少し歴史に溯^{さかのぼ}って同志社の過去を顧みて、その国際性がどう評価されるかということについても、皆さん方のそれぞれの領域からお話を伺えたらと思います。

吉田清太郎という人の伝記がありますけれども、御所で死んでいる猫を自分で食べて、山室軍平に自分のご飯を食べさせたという人ですが、彼はもともと工学をやりました。

しかしそのために、英語を勉強するつもりで同志社に入ったら、こんどは聖書を勉強するようになった。もう一人、丹波の井上善吉という人がおられますが、宣教師のケーリさんが自分の英語を直してくれたのがきっかけで同志社へ入って勉強した。そういう点で、同志



北垣 宗治氏

社に行けば英語を勉強できる、宣教師もあり、国際社会の教育をしてもええという、そういう点が強かったんじゃないでしょうか。

平井 私自身は同志社に育ったものじゃないくて、七年前に入っていたんですが、じつはさきほど申しましたように、テクノロジの社会では研究開発が非常に競争なんです。ところが欧州系の方々つきあいますと、そういう競争相手という気は全然しません。と申しますのは、やはり相手のアイデアを認めて、そっちの分野の研究はその人にまかせる、自分はまた独自に新しい分野を開発するんだという考え方がはつきりしております。日本の学会では、まったく同じような論文が数篇出て、ほんとにせこましい競争なんです。彼らといういろいろ話しますと、やはり最後はキリスト教じゃないかと思いました。彼らとつきあっていて、無宗教に近い私は非常にひけめを感じました。それで、国立で講座を持ってぬくぬくとしておったのでございますが、キリスト教主義というものにひかれて入れていただいたような次第です。とくにヨーロッパ系の先生方とつきあっていると、ど

ことなくそういう感じがして、やはり宗教をもっている人の違い、底の深さというものをまざまざとみせつけられる感じがしております。

竹中 前に、ダウブさんという宣教師の方で工学部にいらっしゃった方がありますね。

平井 さきほどおっしゃった方々のように、私、新島先生のこととは全然存じませんでした。ここへ来てはじめてお墓参りをしまして、新島先生という偉い方がおられたんだなということを感じたのです。

竹中 同志社の女子教育のほうでも、やはりそういう国際的な教養を身につけさせるという点があったのでしょね。

中島 そうだと思います。とくに女子部にはデントン先生がいらっしゃいまして、全身全霊をあげてキリスト教に根ざし、国際的な視点に立って女子教育のためにつくってくださったわけですから、それが女子部にはずいぶん影響しております。しかし、女子部でも、「同志社の英語」にあこがれてきたという人もかなりいると思います。

北垣 デントン先生のことが出たのでちょっとつけ加えさせていただきますと、生島さ

んの編集された『同志社歳時記』のなかに、「デントン先生の哲学」というのが載っていますね。あれは読んで愉快にならずにおれない言葉です。デントン先生いわく、「世界でいちばん善い国は日本である。日本でいちばん善い所は京都である。京都でいちばん善い学校は同志社である。同志社でいちばん善い学校は女子部である。」この最後のところでワッと笑いたくなるんですが(笑)、しかしその信念があつてほんとに宣教師としての仕事が出来たんだと思います。この自信は見えなくなっちゃならないと思いますね。

中島 デントン先生についてのエピソードはたくさんありますが、国際交流に関係のあることで一つ思い出されるのは、松田道先生が昭和六年に、ボズビッセルさんあてに出されたお手紙のことです。松田先生は、同志社百年の歴史の中で、ただ一人の(日本人としての)女性の校長なのですが、定年を前にして、明治十八年同志社女学校以来のことを回想し、そこに綴っていられるのです。女子大学の学報「しづさ」の女子部百周年記念特集に、私の翻訳したのが載っていますが、特に印象に残っているのは、明治二十年代に松田

先生が米国へ留学される時にデントン先生がどのようにお世話されたかということ、同志社におけるデントン先生のご活躍ぶりです。先生のお言葉によりますと、「デントン先生の食卓の雰囲気は非常に国際的で、先生のところへ招かれたお客様の間では、外国人であろうと、日本人であろうと、いつも誠実で、善意に満ちた、いきいきとした会話が交わされています」ということです。

外国人が京都に来られると、ミヤコホテルに泊られようと、どこに泊られようと、先生はデントンハウスに招かれて、よい意味で同志社の宣伝をされ、寄付の依頼をされた由、聞いております。同志社は、特に女子部は、そういうところを中心として動いていたという感じが強いです。

竹中 バーナード・リーチという人がおりますね。あの人がやはりデントンさんを訪ねて、いま倉敷の民芸館の館長をしている外村吉之介さん、当時女専で教えていらしかった柳宗悦さんもいて、それを堀内さんが撮っている写真があります。外村さんの奥さん清子夫人は同志社の女専の卒業生ですね。そういう民芸の人たちの国際的に心かよう話し合

いの場所が昔のデントン館のところであつたんだなということがわかります。

北垣 英文学のほうではI・A・リチャーズという大先生がいるんですが、この先生に私ハーヴァードで会いましたときに、同志社から来たといいましたら、さっそく、自分は若いころ妻と二人で日本へ行つて、デントンの所を根拠地にして日本のおもな山に登つたというんですね。私、はじめI・A・リチャーズ先生にどんな話をしていいか、怖くて恐れていたんですが、そういうことから非常にいい感じで話ができました。これは昭和初期のことだつたと思いますが。

竹中 鶴見さんは、新島の伝記を『同志社の思想家たち』のなかに書いた新島襄の伝記に、「大洋上の思索」という副題をつけています。つまり新島が函館を出て二年ばかり海を転々として、そしてポストンに着くわけですが、そのなかで新島は開けられていた。島国の青年が外国に行くことによって開けられて、やがて同志社をつくる。創立者新島のなかには、「世界に開けられた人間」をつくるという気持ちがあるに強くなつたんじゃないかと思うんです。

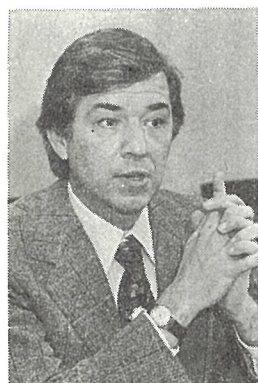


佐藤 幸夫氏

北垣 そのとおりだと痛感しております。新島が同志社の創立者であったということ、同志社の出発点として非常にだいじなことで、同志社の国際主義を考える場合にやはり新島が原点になっていると思います。

竹中 そこに戻ってゆく。避けられない一つの使命みたいなものが感じられますね。

北垣 新島はまず十年間も海外で生活をしたわけですし、そこで多くの友人をつくりました。また宣教師との間に非常に堅いフェロシップを確立しておったわけです。デイヴィスはその一人ですし、ラーネッド、ゴードン、グリーンとか、それぞれの宣教師たちとの間にあつた友情をもっていたわけですね。もちろんボストンのハーディーとその家族、またアームストではシーリー先生とその家



J. M. ラッシイ氏

族、早く亡くなりましたけれどもテラー船長、それからフリンツ牧師だとか、そのほかたくさん新島の友人であったアメリカ人がいたわけです。

最近、同志社の歴史を興味をもって調べておりますと、新島に次ぐ国際人はどうも原田助総長であつたという気がしてしょうがないです。『原田助遺集』を読んでみますと、あの人はイエール大学に留学して、そして帰ってきてやがて同志社の総長になりますけれども、原田さんが総長をしている間にタフト陸軍長官が京都に来て同志社で講演をするんですね。私知っているかぎりでは、のちにアメリカの大統領になった人で同志社で講演したのはタフトだけだと思います。そして原田総長はこんどアメリカへ行ったときにはちゃん

とタフト大統領を訪問しておりますし、ホワイトハウスに招かれております。それから原田さんがイエール大学に留学したときに、市原盛宏、湯浅吉郎、森田久万人が同じ時期に留学しているんですね。エディンバラの世界宣教会での講演のことを思えば、原田さんの国際主義というのは徹底した、堂に入ったものであつたとかんじます。

竹中 原田助は、のちにハワイ大学の教授になられますね。そのころですと、日系人というのはサトウキビ畑に日本から出かせぎに行った人たちが多かったのですが、そういうなかでハワイの最もすぐれた指導者として尊敬されている人の一人であつたといわれています。

歴史の上でもう一人忘れてならないのは、原田助ののちに総長になりました海老名弾正があります。神学部で教鞭をとっておられた高橋虔先生は、学生時代に海老名弾正の秘書をしてもらったんですね。どんなことが印象に残っていますかと伺ったら、即座に先生のいわれたのは、インターナショナルという言葉ですと言われました。海老名弾正というと熊本バンドで、非常にナショナルなことを連

想するんですけども、海老名が就任するのは大正九年でして、第一次大戦のあとですね。日本の国内では大正デモクラシーという自由化の時代でし、国際的には国際連盟というものが結成されてきた時代です。海老名は総長就任の演説で、四つの柱を挙げています。一つは人格教育ということ、二番目がデモクラシー、三番目がインターナショナルリズム、四番目が男女平等に基づく女子教育、この四大主義に基づいて同志社は新天地を開拓すべきだという主眼です。『自分がたまたま新島の英文の論文を見たときに、「日本よ、日本よ、もし我なんちをわすれなばわが右の手にその巧^{たぐひ}をわすれしめたまへ」という詩篇一三七篇のことがあった。非常に愛国のうたである。しかしそれと同時に先生は熱烈な愛国心に加えて大いなるインターナショナル・スピリット、すなわち世界魂を有しておられた。これ実に同志社の大精神であります。今後の日本も列国共立の利害から打算してくるにあらざれば孤立するほかはありません、日本は世界的頭脳を有する人物を要します」と、申しています。

中島 海老名先生はいつまで総長をしてお

られたんですか。

竹中 昭和三年までです。

中島 海老名先生の時代にスチューデント・ティーチャーというシステムをおつくりになったそうなんです。これは、アメリカから派遣された二世の人が同志社で英語を教えながら、日本文化を学び、帰国してアメリカ在住の日系アメリカ人に日本語・日本文化を教えるという制度だそうですが、昭和のはじめに、同志社は国際交流という点でずいぶん進んでいたのですね。目だたないところで国際交流に大いに貢献された女子大学名誉教授の吉川順先生は、たしか、スチューデント・ティーチャーとして同志社へおいでになったのだと思います。

竹中 いまの大学のアメリカ研究所の大学所長のお父さんの大下角一氏は、神学部長や大学長をされましたが、たしかそのスチューデント・ティーチャーでハワイから見えたんですね。

ラッシー先生は、さっきお話の出た宣教師とかかわりから同志社とミッション・ボードとの関係というようなことで感想はございますか。

ラッシー 昔はたしかに宣教師が日本に来て熱心に教育に尽力しました。ともすれば、しかし、宣教師の方が教えに来ているという感じでした。これからは、相互の学びあいが必要になってきています。それから、キリスト教の精神をもって、さまざまな学問の領域で貢献する外国人教師が必要となってきています。日本から外国にいつて短期間でもその学校や教会で働く人材が必要とされているように思います。

竹中 戦争の暗雲がただよってきたとき、たしか昭和十五年の十一月でした。アメリカン・ボードは、当時同志社にいたカープさんという宣教師を通して、「トレシーの書いた「アメリカン・ボード史」(Joseph Tracy, History of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, 1842)を同志社に贈っています。これは、ボードにもたった二冊しかない稀少本の一冊でありました。これがわれわれと同志社の絶えることのない深い関係をあらわすシンボルだということを記しています。

北垣 何年ぐらい前の歴史ですか。

竹中 一八一〇年にアメリカン・ボードができます。この本は一八四二年に出たもの

で、アメリカン・ボードの背景と設立期のこととがくわしく記されている貴重な記録です。この本にはアメリカン・ボードの心がこもっているといってもよいでしょう。

今日の国際交流

佐藤 さきほどラッシー先生のおっしゃったことは、とても意味のあるような気がいたしました。たしかに古い時代から同志社の国際交流の歴史をたずねてみますと、やはり宣教師の先生方とのかかわりでキリスト教というものが背景にあつて、それとの関係での国際交流ということが非常に強くあらわれていたと思うんですけれども、ごく最近になりますと、キリスト教はもちろん背景にありますけれども、それとはまた別の意味で学問なり



竹中 正夫氏

教育なりの面での外国人の先生方との交流ということが強くあらわれているんじゃないかという気がします。

竹中 いまのお話からもひとつ現代のことに入りたいと思います。

現在なされている同志社のそれぞれの部門におけるはたらきから、その特色をお話しいただけませんか。

北垣 私はアーモスト館で寮生活を送ったものですから、このことは申し上げたいと思いますが、新島襄先生はアーモスト大学の一八七〇年の卒業でありまして、アーモスト大学は、さきほどお話のあつた海老名先生のアメリカ遊説の反応の一つとして、創立百周年の機に、アーモスト大学自身世界にたいして責任をもつ教育機関である、というような考え方からして、同志社に学生の代表を送ろうということ、一九二二年にスチュワート・バートン・ニコルズを送ってきたわけです。彼は二年間同志社大学予科で英会話を教え、ESSの顧問とか、あるいはスポーツ関係のいろんな仕事をいたしまして、たくさんの方人をつくり、愛され、そして惜しまれて帰っていったわけですが、その後継者が

ずっと同志社に派遣されております。一九三二年には、派遣するだけでなく、その代表が住む建物をプレゼントしようということになって、ご承知のアーモスト館が寄付されたわけですね。戦争が起るまでに十人の代表が、ニコルズさん以来来ておりまして、そのうちのいちばん輝かしい存在は十代目のジョン・W・ホール先生、現在イェール大学の日本史の教授であり、アメリカの指折りの日本史家であります。戦争が終わりましてからは、ケリー先生がずっと今日に至るまで館長として派遣されておりますが、ケリー先生はアーモスト大学の学生の代表のみならず、理事会、教授会、校友会をも代表して来ておられます。そこで寮生を十何人入れまして、かなり成功した教育であつたと私は思います。

現在では、アーモスト大学のほうに同志社ハウスというのをつくりまして、一つのアパートですけれども、同志社から派遣されております井上勝也先生一家がそこに住んでおります。アーモスト大学とのそういった交流は非常に強いものですし、今後ともこれは揺るがないだろうと期待しているしだいです。

それと私関係しておりますもう一つは、

アメリカ研究夏期セミナーでございまして、これは一九五一年から始まって今日に至っております。京都大学と同志社大学が共同で仕事をしている、おそらく唯一のものじゃないかと思うんですが、いろんな財団から寄付を仰ぎ、今日に至るまで続いてきました。現在では二週間、全国から受講生を集めまして、アメリカから有数の学者を招き、朝九時から正午まで講義を聴いて、そして午後にも討論するという形式をとっております。これは現在も非常に盛んでございまして、申込者多数であり、かつて一九五二年ごろは受講生のなかで留学した経験のある人は一人もいませんでしたけれども、今日では大多数留学した経験のある人がやってまいります。そしてアメリカまでちょっと夏休みに二週間行くのがむつかしいから、京都に来て勉強するといった意味での受講生も、おそらくたくさんあるように私は見ております。これも同志社としての国内的な、そして国際的な、たいせつな奉仕であると思っています。

もう一つつけ加えますと、ハーヴァード・エンチン・インスティテュートというのがありまして、ハーヴァード大学とは別の組織

で、これは一種の財団です。アルミニウムで大もうけをしたある資産家がごっそり寄付したお金でその財団ができたのです。そしてそのお金でハーヴァード大学の中に日本、中国、朝鮮関係の図書館をつくりまして、現在ではアメリカ有数の東洋関係の研究所となっています。一九五四年当時から日本、台湾、韓国、香港等の学者に招待状を出しまして、ハーヴァード大学で一年間ないし二年間勉強させる制度をつくりました。同志社からは、かなりの数の先生方が、これでハーヴァードで勉強することができました。金山正信先生が初代のスカラーで、木村俊夫先生、大下尚一先生、田口芳弘先生、高橋悠先生、浅香正先生、私、岡田妙先生がハーヴァードに留学いたしました。もう一つはハーヴァード・エンチンから同志社に頂いた金で、ハーヴァード・エンチン東方文化研究所ができ、そのときに買ったかなりの重要なコレクションが、現在、人文科学研究所にひきつがれてあるわけです。

竹中 東方文化のコレクションは法学部の内田智雄先生が集められたものであります。そのあと、人文研のキリスト教社会問題研究

のために援助がなされました。毎年約三百万円ぐらいでしたが、十五年にわたって一つの大学の特定の共同研究のために、ハーバードが継続して長期的な援助をしたということは、きわめてまれなことであつたと思います。これは、同志社でなされている共同研究に対する信頼と期待が実を結ばしめたものと思っております。おかげで、近代日本におけるキリスト教と社会問題についての資料は世界中で同志社がいちばんよくそろっています。アーモスト館の話が出ましたから、ハワイ寮の話も……。

ラッシー 正式の名前は同志社布哇寮、英語では Doshisha Friend Peace House といひ、御所のすぐ東、梨木町にあります。ハワイのリチャーズという親日家の寄付によつてフレンド平和財団が設けられ、はじめてハワイから学生を送つて、同志社で英語を教え、また、日本の文化を学ぶようにはかったのははじまりです。寮が設けられたのは昭和十四年で、もともとあつたアメリカン・ボードの宣教師館を買収し、改装したものです。昭和四十三年に新館ができました。現在十二名ぐらいの学生がおり、ワシントン州のワシント

ン州立大学と友好関係を結んで交流しています。

竹中 いま工学部には外国の学生はおりますか？

平井 韓国の人がおります。前にインドネシア、台湾の人もおりましたが、外国人の学生は少ないようです。ただ、工学部では、ユネスコの事業の一環としてのイアエステ・ジャパン（国際学生技術研修協会日本国内委員会）があり、夏期の二カ月の外国での実習を世界各国交換で実施しています。二カ月間日本から諸外国に送る、諸外国から日本に招く、互いに同数ずつ交換し合ひまして、技術的な経験をつけさせようという組織があります。その関西での世話大学は、京大、阪大、同志社で、十月に試験をいたしまして、諸外国における研究所、工場に招待してもらっています。日本からは西ドイツへの希望が非常に多いのですが、東南アジアには希望が少ない。それで日本と東南アジアの交換ができないわけです。そういうところに困っている点があります。

竹中 さっき大学の国際交流委員会の話がありました。発足後間もないことで制度上の

ご検討が多いわけでしょうけれども、プログラムのことでお考えのことがありますか。

佐藤 この委員会は、内規によりますと、

国際交流に関する諸事項の原則並びに制度について企画・審議するという、たいへんいかめしいのでございますけれども、結局、国際交流について多様な事がらを大学の正式の機関でいろいろ話題にして、それを学長に答申をするという機関が必要だということから発したたしたものでございます。最近、交流が盛んになってくるにつれて、とにかく同志社を紹介する意味で、英文で書かれたカタログがまず必要ではないかということから、大部なものではありませんけれども、目下作成中で、まもなくできると思います。それから外国人留学生に関する英文の要項をつくりました。また、これまで百年以上も続いておりますアモスト大学との交流に、最近いろいろな面から、書面による協定が必要とされてまいりましたので、その内容なども審議いたしております。

あといろいろな細かなことも大学として議論する場がございませんから、こういう委員会には多様なことが出てまいります。国外の

大学で取得した単位を、同志社としてもそろそろ卒業単位のなかに認めるべきではないだろうかとか、あるいは卒業単位としなくても、取得した単位として随意科目というような形で認めるべきではないだろうかとか、そういう、国際と名のつく多くのことがらが話題になっております。

竹中 国際交流は自然発生的に行われていきますし、自然的に行われることが望ましいと思います。委員会は、それを助成し、まとめるという性格をもつのでしょうか？

佐藤 そういうことでございます。大学のほうにいままでそういう機関がございませんでしたので、この委員会ができたわけです。そしてまた、学事課に国際係が正式にでき、まだ、たいへん人員が少なくてご苦労があるわけですが、そこがいろいろな意味で窓口になります。

竹中 AKPというアメリカの幾つかのカレッジのプロジェクト、あれは、はじめ文学部が受け入れてくださったんですね。

北垣 そうです。AKP (Associated Kyoto Program) は、九つのカレッジが集まりまして、四年のうち一年間京都で勉強させようという

計画です。アーモスト、カールトン、コネティカット、ウェスリヤン、ウイリアムズ大学がスポンサーで、そこへコールビー、マウントホリヨーク、オベリン、スミスの四大学が加盟しております。毎年夏休みが終わるころに二十人くらいの学生を、ディレクターをつけて派遣するのが特長です。そしてそのプログラムにしたがって学生たちは分宿し、共同で講義を聴くこともあるんですが、そのうちに各自のプロジェクトにしたがって、自由な研究と見学、旅行などをする時間をもつわけです。そして最後にそれぞれがペーパーを書きまして、それで一年間の評価をしてみよう、そういった制度です。初めのころは、どうやって下宿をみつけるかということで、世話にあたった秋山健君などは非常な苦勞をしていました。

竹中 女子大のほうでもいろんな交流があると思うんですけども。

中島 以前、タイ国の留学生が来られ、英語はできるので英文学科にお入りになりましたが、日本語がわからなくて、訳をするときなど、非常に困られたようです。ですから、そういう受け入れ態勢がないときに東南アジ

アの方が英文科に來られた場合には、いまのところちょっと困るのではないかと思えます。韓国や台湾の方も来られますが、日本語ができる場合は問題がないようです。

その他の交流としましては、先生がたの研究活動によるもののほか、ドイツの交響楽団の演奏会やロンドン・シエクスピア劇団の公演会、外国人学者による学術講演会などが、かなり積極的に行われています。

国際理解を深めることへの努力について、身近なことを一、二あげますと、L・Lでの視聴覚機器を使つての学習を組み合わせた、外国人教師による「英米文学の背景」というユニークな授業（必須科目）を設置したり、日本人の国際感覚を養うことに責任のある、未來の英語教員の養成に力を入れたりしています。これは特に、同志社女子部の卒業生が、昔からかなり高い評価を受けてこられた、その伝統を受け継ぐという意味もあつてのことですが。

国際交流に関係のあるもう一つのこととは、私を含め五人の女子大学の卒業生が奨学資金を頂戴したブレイズデル・インスティテュート (Blaisdell Institute) のメンバーであり、

ボモナ大学の先生をしていられる女性が日本に來られた時、女子大のキャンパスにあるイングリッシュ・ハウスを提供し、日本語、日本文化、宗教の研究をされるために間接的な援助をしました。外国人のお世話になるばかりでなく、お礼返しなどしながら、国際的な交流を深めることができたことを喜んでいきます。

さきほどから北垣先生などのお話を伺っていますと、同志社大学ではいろいろな形で国際交流が行われているようですが、女子大学のような小規模のところでは、なかなかそういうわけにはいきません。そこで、ついでは、アメリカの、先に述べましたブレイズデル・インスティテュートのお話をしながら、私の願いを述べさせていただきたいと思っています。

クレアモントの大学 (Claremont Colleges) は、オックスフォード大学にならって創られたクラスター・カレッジで、六大学の上に、大学院が一つと、ユニバーシティ・センターが一つあり、そこに付属して、ブレイズデル・インスティテュートがあります。そのインスティテュートは、世界の文化と宗教の研

究を目的としていて、その主催で、いろいろな講演会や会合が行われ、クレアモントの各大学からも、また、地域社会からも多くの人々がそれに参加しています。また、日本語講座もそこにあり、各大学から、それを取得にきます。単位は大学が出します。私もそこで外国語としての日本語を教えました。たいへんよい経験をしたと思っています。また、一学期間、そこで他の国の人々と寝起きをともにできたこともよかったと思います。

同志社にも、このようなユニバシティ・セクターと、インスティテュートが一つあって、同志社のどの学校の教職員・学生・卒業生も、時には外部の人々も出入りできて、楽しい交流ができ、お互いに啓発される場所があればいいと思うのです。国際交流以前の、同志社内の人間的な温かい交流、横の連携というものが余りになさすぎると思うからです。そこに国際理解を深めるものが加われれば理想的だと思います。

これからの国際交流

竹中 最後に、これからの国際交流についてお話を聞きたいと思います。希望として、

あるいは夢として、自由にお話をいただきましたと思うんです。

私は、四つほど誘い水に申し上げたいと思うんですが、一つは、いままでの国際交流の特色というものが、これはやはり同志社の遺産ですし、伝統ですし、これをわれわれは強化するということを考えなくちゃいけない。それをもうちょっと言いますと、はたしてわれわれは海外のどこに行っても、タフに、まただれとでもイエス、ノーを言いながら働くことのできる日本人をつくっているだろうか、国際社会にフィットするパーソナリティー形成ということをわれわれはしているだろうか。昔の同志社はある程度していたと思うんです。

二番目は海外の人を迎えること。いままで迎えてきたわけですが、そしてその態勢を整えたりしているわけですが、そういう態勢はデントンさん以後十分であろうか、デントンさんは一つのシンボルですけども、AKPなども迎えてやっておりますけれども、そういう迎える態勢の問題があります。

三番目は、いままでは比較的アメリカとの交流であった。これは同志社の生い立ちがそ

うですし、歴史からそうであって、それは尊ぶべき遺産だと思います。しかし世界は狭くなっておりますし、東欧をふくめたヨーロッパ、そしてとくにわれわれがおかれているアジアの友人たちを迎えて交流する。いま女子大のお話がありましたけれども、なかなかむづかしい問題があるわけですが、それはこれからの課題であって、考えなくちゃいけない問題じゃないかと思っています。

それから四番目は、一口でいえば帰国子女の問題でして、創立百周年にあたっていろいろ国際交流の企画の一つの柱でした。これにはかなりの社会的な要請があります。最近ですと、国際キリスト教大学、あるいは千葉県の木更津の高校や慶応がそのような計画をしているように聞いています。関西では同志社がそういうことをやってはどうかというように声もございます。

北垣 いまの四つのポイント、たいへんだじだと思えます。そこへもってきて、私一つ強調したいのは、同志社が京都にあるというところ、これはやはり非常な特色であり、重要な点だと思えます。すなわち、京都は外国から来る人がどうしても訪れたがる第一の

町でありまして、そういった人々をエンターテインするのみならず、それを機会に国際交流をはかるといふことを考えたらどんなものだろうかと思ひます。関西セミナー・ハウスがそういう仕事をしていらっしゃるのです。同志社は御所の北、相国寺の南にあるわけですから、そしてまたアーモスト館にはゲストハウスがありますし、ああいったものを利用して、そういうチャンスをもっとと拡大していくことがたいせつではないだろうかと思つております。

二番目に言いたいことは、かつて百周年のいろんな委員会で私の友人が言ったことをそのままオウム返しに申し上げますけれども、同志社に何か奨学金をつくつて海外からの留学生を集めるといふことよりは、同志社が實際的に評価されるような学問的な業績を上げること、アカデミックな水準を上げるということが、やはりいちばんいいであつて、上げさえすれば、東南アジアからであろうが、米国やヨーロッパからであろうが、やはり来るというんですね。来てもらうよりも来させるといふインセンティブは、やはり同志社が学問的にりっぱな仕事をするといふことだと

思ひます。国際的にりっぱな業績をあげる学者を一人でも多く養成したいものです。それと、人文科学研究所は、いままでの特色ある仕事をさらに特色あるものにしてほしいわけですし、アメリカ研究所は別の意味での窓口だろうと思ひます。

それから、仲間からしかられることを覚悟の上で放言させて頂きますが、同志社の英語教育は、現在では看板に偽りあり、の面が強いございまして、たしかに大先輩たちはみな英語ができたらしいですけれども、いまはわずか二年間で八単位とればよいといふことであり、そしてその八単位でどれだけ英語が読み書き話すようになれるか、これははなはだ心もとないものです。したがつて、同志社の外部団体式の英語学校のようなものができてもいいんじゃないか、八単位をどうしても取れない者がそこへ行つて、夏でもいい、あるいは夜でもいい、訓練をうけてくる。もっとブラクティカルに学生を鍛え、そして世間のそういういった希望者にも英語の授業をする。と申しますのは、英語の単位を落とす学生が非常に多うございまして、現在ではZクラスといふ呼び名で呼んでいる教室にたくさんおつ

て、毎年これが英語教育の一つの問題になつております。

それと同時に、日本語をも教える学校ができなければうそじゃないかと思つたわけです。竹中先生の奥さんもかつて京都日本語学校で教えていらつしたわけですから、まあいったものも一つですが、あれの何倍かの規模の日本語学校が同志社にできるといふことが非常にだいじじゃないだろうか。そういうものがほんとうにできるならば、さきほどの竹中先生の四番目のポイントである帰国してきた人々の受け入れの問題にもつながってくるんじゃないかと思ひます。

ただ、帰国子女受け入れの問題に関しては、せっかく百周年の記念事業のだいじなポイントにあげられていながら、現在のところ大学内でははなはだこれにたいしてつめたいうでございまして、なんとかあれを空文に終わらないようにしていただきたいと思ひます。けれども、これには大きな問題があります。しかし、ICUではうまくいっているようにも聞きますけれど、必ずしもうまくいっていないといふうにもきこえてきます。たとえば、その教育機関を出た人を大学が受け入

れるという保証を大学はまだしていないわけですね。これなしにはスタートがでないとい私は思うのです。その努力を大学と総長との間で早くしていただく必要があるのじゃないかと思っております。たぶん大学のほうが先に心を開く必要があると思いますけれども。

そして最後に一つ思いますことは、ハーヴァードに行っておりまして、むこうでいちばん喜ばれることは、日本で出る本をハーヴァード・エンチン・ライブラリーに送ってあげることなんです。たとえば裏千家が非常にりっぱな裏千家の歴史の本をお出しになる。ああいったものがハーヴァードではほしいわけですね。高いけれども、どうしても必要な、日本文化の粹のようなものを書いた本なんですから、ああいったものがほしい。そういうものを送るようにすれば、これはだいいじな国際交流だろうと思えます。すべての大学に贈る必要はないので、そういう東洋のものを集めている図書館にとめて送るようにする、あるいはあっせんするというじゃないだろうかと思うんです。

中島 女子大学の初代の学長で、宣教師と

して昭和の初めからつい最近までおつとめくだったヒバード先生が、女子大学の学報「しばぐさ」の十四号、百周年記念号でございますけれども、そこに「同志社女子大の誕生と生い立ち」というエッセイをお述べてなつて、将来どう発展したらよいかということを書いていらつしやるんですけれども、北垣先生のいまおっしゃったこととよく似ているんです。まず海外よりの留学生を迎え、日本文化について研究させること。それには京都ほど適したところはない。歴史の遺跡、博物館、日本文化の専門家、あらゆる点において最高の条件がそろっている。ただしこの夢を実現するには、女子大学でもっと多くの英語による講義が必要になるけれども、欧米に留学した先生方も多いから、不可能ではないだろう。海外の留学生のみならず日本の学生が将来海外に留学するときにもプラスになることは言うまでもない。ということ、先生方もできるだけ国際会議に発表するように英文で論文を書かれたらいいのではないか、ということをそのあとに付け加えられております。

栄光館は、デントン先生のお働きを記念し

て、その友人のファウラーさんの遺志によって寄付がなされ、それが三分の一の資金になり、またそのことに感化され、同窓会、一部学生が寄付した三分の一、そのあと三分の一は同志社本部が出したということで、結局その三者の協力でできたものでございますね。「殿を建てよ、さすればわれこれを悦び、また栄光を受けん」という、聖句にちなんで名前がつけられました。

その栄光館に外からも人々が集まってきたと思うんです。最近京都美術館ができましたので、同志社に集まるということはあまりないですけれども、最も同志社的なところに皆が寄り集まっていた、開いた同志社だったと思うんです。そういうことも今はありませんので、そういうインスティテュートなどができて、海外からも受け入れる、また日本の人たちがそこで交わる。そして日本語の教育と英語の教育が同時にそこでなされるということが望ましいと思います。両方の教員養成も含めて。

日本語を教えるということ、その教える先生を育てるということも大切だと思いますし、また外国から来た人がそこで日本語を学

びながら英語を教える、また英語を教える先生を教育するということが生活を共にする親しい交わりのなかでなされるとよいのではないかと思います。

平井 私がいま属しておりますところは、日本語とか日本文化とか、そういうことには無縁でございますので、変なお答えになるかと思いますが、竹中先生が一番に申されましてパーソナリティー教育、これは最近の学生、とくに大学院の学生は国際学会で発表することと非常に積極的でございます。本年度も私のゼミからも三名発表することになっておりますし、それから二番目と三番目のことに関しまして、さきほど佐藤先生がご報告になられました国際交流委員会の受け入れ態勢にしたがい、申し込んできておられるのが台湾と韓国の学生諸君たちで、これからますます工学部でも、この傾向がふえるのではないかと思っております。

これは中島先生がさきほどおっしゃったことに関連するんですが、外務省のコロンボ計画で東南アジア諸国の学生を集め、日本で英語で工業教育をするプログラムがあります。彼らの意見を聞きましたところ、せっかく日

本へ来て学ぶのになぜ英語で講義をするのか、日本の教科書を使って日本語でやってほしいという希望がございました。アジアから来た学生に関しては、そういうこともつとめて考えてみたいと思っております。

佐藤 先生方がおっしゃったことにつきるのでありますけれども、やはりいちゃばんたいせつなことは、北垣先生がおっしゃった私も個人個人の学問的水準を上げることがだいじだということ、これははなはだ重要なことで、大いにこれは努力をしなければいけないと思っております。そうするとやはりあそこへ行ったら勉強したいという形で研究者、学生が大いにやってくるのではないかと思うわけです。

そのときに迎える態勢でありますけれども、いままでの交流はどちらかというと個々人の先生方のご努力で、いろいろな日常のお世話に至るまで全部先生方が個人的になさっておったわけでございます。同志社大学としてそういう機関に国際係ができたわけでございますが、これとてもまだ十分でございませぬので、この係が機縁となって、なにか外国人学生のためのアドバイザーとか、客員研究

員のためのプログラムなどの担当者が設けられれば、さらにお世話ができると思います。これは夢かも知れませんが、ぜひとも。

それからもう一つは、そのような日本語教育とか日本文化の紹介のために、また日本の学生あるいはわれわれもいっしょになって理解を深めていくという意味で、インターナショナル・ハウスのようなものを、同志社がバックになってつくることも考えられると思います。

平井 私がまいりましたマンチェスターにも、佐藤先生いわれましたように海外学生(Overseas Student)へのアドバイザーという組織があり、その先生はドイツ語の先生でしたので、私はドイツ語で英語を習いました。同志社にはそういう組織がないんですが、必要なことではないかと思っております。

ラッシュイ かつてのデントン先生のような方は、確かにりっぱな働きをされたと思いますが、現代からみると、やや専制的だったと思います。これからは、相互の交流を深めてゆくことが必要だと思えます。

竹中 最近の傾向としては、転々とした渡り鳥のような短期間の観光旅行でなくして、

京都に五週間あるいは十週間いて、じつくり勉強したい、できれば日本文化の、たとえば建築ならば建築、絵なら絵について勉強して帰りたい、こういう傾向が多いと思います。

そして関西セミナリー・ハウスなどで二カ月なり三カ月泊まって、ちゃんとアドバイザーをつけて、日本の専門家をアソシエート・アドバイザーにして、相当なお金を用意してくるわけですね。きみたちそのお金はどうやって用意したのというと、半分は自分が稼いだのをためて、半分は銀行から借りてきた、帰ったらまた働いて返すというわけですね。それだけに、京都へ来て日本文化を少し深く学びたい、そういうのをできたら大学でやってほしい、関西セミナリー・ハウスがアレンジしてやっていくのでなしに、大学でアフィリエイトしてやれたら非常にうれしいという、そういう願望があります。成人教育が国際化されているということですね。こういうことにわれわれはどう向かっていくか、ということが出てまいります。

さっき北垣さんがちょっとお話しになりました帰国子女の問題については、ニードはぜひぶんにわれております。どういふものをや

っていくかということは、これからの問題でしょうが、そういうことを同志社はやっていけそうなのか、いくべきなのか、さっき北垣さんのご意見もありましたが、ほかの方も自由におっしゃっていただきたいと思います。

中島 結局、日本語ができないから日本へのアジャストできないわけですね。そうしたら、日本語のインテンシブ・コースのようなトレーニング・コースがありまして、そこでしていただければ普通のコースに入れるようになるんじゃないか。

佐藤 その辺のところが非常にむづかしいことだろうと思うんです。

中島 もし設けるとしたら、各レベルにしたがってたくさん設けなければなりませんでしょう。

平井 ドイツのゲーテ・インスティテュートの行っている衣食住、三食つきで二カ月単位で徹底的に少人数教育をするという方法はどうでしょうか。

北垣 それは日本にあてはめる場合、日本語の全然できない人の場合ですね。ところが問題は、日本語はできるんですが、外国に行っていたため、日本の塾でやるような、入試

向けの準備の全くできていない生徒をどうするか、という問題が深刻によこたわっています。

竹中 それから、外国で、違った文化の下に幼いときから育ち、二つあるいは三つの国の言葉を話すことのできる、日本人としてはきわめて貴重な価値をもった存在だと思えます。それをいままでも日本の社会は迎えないから、日本人はそういうものを国際的な孤児にしている状態です。そして日本の学習塾ではマル、ペケで覚えていく。あれにフィットしなければ日本の社会からは締め出しです。それは日本のためにもあまりよいことではない。三つ子の魂百までもといいます、言葉の点から、文化的生活様式から、国際的な感覚をもったものを迎えて訓練する、そういうことは日本ではできんのかなということを思うわけです。

佐藤 私も、夢ということでそう思います。つまり、帰国子女の教育機関が日本語の教育をし直して、現在の受験競争に耐えうるような、もとのまったくの日本人に戻してしまふということだけを目的とするのでは、ちょっと意味がないと思います。

竹中 意味がないですね。

佐藤 せっかく長いあいだ子供なりに経験をして、いいものをもっていきるわけですから、それが何らかの形で伸ばせるような教育機関が必要じゃないかなと思います。

帰国後、日本語が上手になって元にもどった、しかも、物のみかたというか、考えかたというか、いいものがまだ残っている、それをどこかで伸ばせるところがないかなという気がするのです。

平井 私のスイスにいる友人は、そのお嬢さんが大学卒までは向こうにおるといふ決心をしております。家では日本語、外ではスイスドイツ語という日常で、これを聴講可能なまでに引き上げることは大変なことだと思っております。まったく初めからやるのと変わりがありません。百周年記念事業のときにお話が出て、私も非常に興味があることなんですが、同志社のような国際交流に特色ある学校がそういうことを考えていくことは、意味があると思うんです。

中島 先生のおっしゃいますのは、何か特別に教育していくことをおっしゃるわけですか。

竹中 いや、二つ可能性があると思うんです。いまの高校や中学にインテグレートするという一つの行き方、それからもう一つはその人たちだけの別の学校をつくる行き方があると思います。

中島 日本人として生きる場合にどちらがよろしいでしょう。

佐藤 日本人として生きるかぎり、やはり、ちゃんとした日本人に育ってもらわないと困ります。しかし、そうかといって、せっかく貴重な経験をしてきたものが無になってしまわずに、それを伸ばすことを考えることができないかと思うのです。

中島 それは無になるでしょうか。学校のシステムの関係で一時無になるかもしれないけれども、その人の長い人格形成においては無にならないと思いますから、早く日本のシステムのなかに入れる方がよいとおもいます。ですから、語学教育をインテンシブにやっ、言語の障害をとりのぞくことが必要でしょう。そういう人たちを同志社が受け入れるということは、その人たちのためにもなるし、また同志社のためにもなると思いますから、そういうプログラムは大いに促進してい

ただけたらありがたいと思います。

竹中 この最後の問題は一つのたいせつな今後の課題であると思います。

予定の時間もだいぶん過ぎましたし、こちらで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

(一九七八年一月十八日)

